

井筒俊彦の瞑想体験と 東西思想の比較研究



2011.9.4

日本宗教学会@関西学院大学
宗教情報センター 葛西賢太

井筒俊彦(1914-1993)とは誰か

- ・輝かしい経歴と、語学や哲学をめぐる伝説
- 慶応大、マギル大、イラン王立哲学研究所、在野の哲学者、エラノス会議の講演者
- ・読者に古今東西を飛翔せしめる著作：『意識と本質』。
- ・近年、若松英輔による、著作集未収録のエッセイ『読むと書く』、評伝『叡智の哲学』が刊行
 - ・「イスラームの硯学」としての井筒ではなく、言語の枠組みを比較することによる、古今東西の諸宗教思想・神学の比較研究(共時的構造化)に注目(「コトバの哲学者」)

内容

1. 井筒俊彦とは誰か
2. 井筒は「イスラームの硯学」か？
3. 井筒の瞑想体験
4. あらためて、井筒俊彦とは誰か

イスラームの硯学？

- ・クルアーン邦訳
- ・講演録『イスラーム文化』(岩波文庫)が31刷
 - ・ビン・ラディン殺害の時もどっと売れたという
 - ・日本では、「イスラームの硯学」と理解されている
- ・マレーシアでの国際会議と会議録: Anis Malik Thoha, ed., *Japanese Contribution to Islamic Studies: The Legacy of Toshihiko Izutsu Interpreted*, IJUM Press, 2010
 - ・中村廣治郎先生、澤井義次先生の参加

1. 井筒俊彦とは誰か

イスラームの硯学？ コトバの哲学者？ それとも？

共時的構造化

古今東西の、出会うはずのない思想家(イブン・アラビーと老荘など)が饗宴する場の設定。

「複雑に錯綜しつつ並存する複数の哲学伝統」を「現在の時点で、一つの理念的平面に移し、空間的に配置しなおすこと」「時間軸からはずし、それらを範型的に組み変えることによって、それらすべてを構造的に包みこむ一つの思想連関的空間を、人為的に作り出すことによる「共時的構造化」(『意識と本質』、410~411頁)

己れの身に主体的に引き受ける

- ・[共時的構造化により]取り出された「根源的パターン」のシステムを、一度そっくり己れの身に引き受けて主体化し、その基盤の上に、自分の東洋哲学的視座とでもいべきものを打ち立てていくこと」(『意識と本質』、410～411頁)

井筒の直観

- ・古今東西の思想を同じ平面で比較させうる語学力
- ・言語による分節化と思想の拘束(言語アラヤ識)、分節化以前／分節の超越による、超越的世界の直観的把握(コトバの哲学)
- ・テキストの翻訳的理解にとどまらず(翻訳的理解よりも?)、語彙と語彙との連関を星座のように捉える直観

コトバの哲学

- ・この作業にあたり、井筒は言語のもつ力に注目し、
↓「超越の世界が自己言語化するプロセス」としての「コトバ」
↑私たちの視野を限定する分節的な日常言語(言語アラヤ識)を考える。
- ・言語という有限な枠に受肉されたこの世界に逆らい、言語という枠から再離脱しうる意識を比較考察する。

2. 井筒は「イスラームの硯学」か？

池内恵の批判から

語彙どうしの連関を直観的に把握

- ・ Ayah, sukr, kufr の緊密な連関を示す井筒
 - ・ 創造の恩寵としての ayah
 - ・ 感謝 Sukri は、創造を想起すること
 - ・ ※ Sukran ありがとう
 - ・ 人間以外の存在は、創造の喜びを存在そのもので示して感謝することができる。人間は自意識を持つので、感謝を忘却でき、根無し草となる。
 - ・ 不信仰 kufr とは、恩を忘れること
- ・ 三つの語彙の連関を星座のように直観し、創造者と被造物との関係を示す

井筒の研究対象選択

- ・ 池内恵の批判
 - ・ 中東地域研究の観点
 - ・ イスラームの実像から離れた対象選択。例：『イスラーム思想史』。法学記述わずか、神秘主義哲学に紙数
 - ・ 内面志向
 - ・ 瞑想体験投影？
 - ・ 井筒の読者の志向(嗜好)と合致
 - ・ 「イスラームの硯学」という「誤解」
 - ・ 総合的なイスラーム研究ではなくモノグラフと介すべき。
 - ・ ※池内「井筒俊彦の著作に見る日本的イスラーム理解」『日本研究』35、2007年。

3. 井筒の瞑想体験

そっくり己れの身に引き受けて主体化する、とは？

〔神秘化を理解しようとするなら〕「自らも彼等と同じ直観を以て宇宙の深奥幽邃なる秘儀に徹し、彼等と同じ体験によって霊覚の境涯に転身しなければならぬ」(神秘哲学)

神秘体験と哲学的思惟の両立

だが後日、西欧の神秘家たちは私にこれとまったく反対の事実を教えた。そして特にギリシャの哲人たちが、彼らの哲学の底に、彼らの哲学的思惟の根源として、まさしくvita contemplativaの脱自的体験を予想していることを知ったとき、私の驚きと感激とはいかばかりであったろう。私はこうして私のギリシャを発見した。

井筒俊彦「序文」『神秘哲学 第2部 神秘主義のギリシャ哲学的展開』井筒俊彦著作集、中央公論社、1991年、198-199頁。

井筒父子の「内観」

先ず墨跡淋漓たる「心」の一字を書き与え、一定の時間を限って来る日も来る日もそれを凝視させ、やがて機熟すと見るやその紙片を破棄し、「紙上に書かれた文字ではなく汝の心中に書かれた文字を視よ、二十四時の間一瞬も休みなくそれを凝視して念慮の散乱を一点に集定せよ」と命じ、さらに時を経て、「汝の心中に書かれた文字をも余すところなく掃蕩し尽くせ。『心』の文字ではなく文字の背後に汝自身の生ける『心』を視よ」と命じ、なお一步を進めると、「汝の心をも見るな、内外一切の錯乱を去ってひたすら無・心に帰没せよ。無に入って無をも見るな」といった具合であった。

4. あらためて、井筒俊彦とは誰か

井筒父子の知的詮索の禁止

私は同時に、かかる内観の道上の進歩は直ちに日常生活の分野に内的自由となって発露すべきものであって、修道の途次にある間はもとより、たとい道の堂奥を窮めた後といえどもこれに知的詮索を加えることは恐るべき邪解であると教えられた。そしてまた事実、当時われわれ父子の共通の話題をなしていた碧巖録、無門関、臨濟録、その他禅宗祖師たちの語録はいずれも私に、「思惟すべからず、思惟すべからず」と知解の葛藤に墮する危険を戒めているように思われたのであった。……人間の思惟の典型的活動ともいべき哲学や形而上学が観照的生の体験に基づいて成立しうるであろうとは夢にも思っていなかった。

井筒の対象選択(再考)

- ・池内批判についての葛西コメント
 - ・中東地域研究の観点
 - ・神秘主義哲学に紙数→イスラームという巨大な他者を研究するのに対象を絞ることは必須。それにしても、選択規準は？ どのようにして膨大なテキストからこれらを選んだか。
 - ・井筒が描くムスリム像と、マジョリティとのズレ
 - ・沈黙思考ではなく社会活動を重視するスーフイズム
 - ・出典註なく、語学能力によるどころの職人芸 検証困難
 - ・内面志向
 - ・瞑想体験投影？ フンボルト派の哲学者
 - ・井筒の読者の志向(嗜好)と合致

瞑想体験と井筒の研究

- ・ 修道的探究と哲学的探究とは両立できる！
 - ・ ギリシャの哲学的思索に出会っての解放感。
 - ・ ひるがえって「共時的構造化」と「コトバ」についての思索を、古今東西に探究！
- ・ 瞑想実践者はそれを想起するよう求める呼び掛けが著作にしばしば折り込まれている
 - ・ 井筒自身は？「一度そっくり己れの身に引き受けて主体化」するとは、自らの瞑想体験に照らして東西の思想を比較することでは？

瞑想は認識を広げるのか狭めるのか

- ・ 瞑想実践の体験により、思索の対象を志向
 - ・ 井筒の志向は彼のイスラーム研究にも現れていたが、読者からは見えにくかった。
 - ・ 瞑想は高度の認識をもたらすのか。あるいはそうではなく、視野あるいは視点を限定して、あらたな発見に至る、このことの性格。
 - ・ 井筒の修道が、父とではなく、僧堂であったら？

ありがとうございました
